

全日本オリエンテーリング大会を考えるワーキンググループ パブリックコメント募集(2015年3月8日募集開始)に対する応募内容

平成27年(2015年)6月18日
公益社団法人日本オリエンテーリング協会
全日本オリエンテーリング大会を考えるワーキンググループ 座長 木村佳司

多くのパブリックコメントが寄せられました。その内容を公開します。
公開するにあたって、個人情報に配慮して、最小限の編集を入れました。

競技者

年齢別選手権は、必要不可欠ですか？

全日本大会に必要な不可欠なクラスは21Eと20Eだけにして、年齢別選手権はすべての年齢層で行わなくても、「安全性への配慮が必要な年少者や高齢者を除いた」年齢層のみのAクラスだけにすると、Bクラスや初心者クラスは無し、というのではいけませんか。

選手権大会の本来の趣旨から考えるとEクラスだけでいいと思いますが、それでは参加者が少なすぎて採算面で問題があるので、あまり手間が増えず、人数の多い年齢層のAクラスを付け加える方が良いだろうと思いました。

(2015年3月15日)

競技者

①WGの継続の上の4つの選択肢についてコメントさせていただきます。

(1) 開催頻度を変える。たとえば、隔年度の開催とする。

→毎年、継続して開催していた理由が不明であり、継続開催を絶対とするなら、隔年でよいかと思えます。検討及び準備期間があれば、もっと課題が軽減されるかと思えます。

(2) 全日本大会をミドル・ディスタンス競技とする。その結果、ロングディスタンス競技に比べて狭いトレイン面積で実施する。

→主観ですがあらゆる世代に人気がある種目はロング競技ではないでしょうか。(今も全日本ミドルがありますが、集客を比較すると。)ロング競技は続けて欲しいです。2マップや既存マップであれば、できるトレインはあるかと思えます。

(3) 開催トレインをある程度固定化し、その中で複数年のローテーションで全日本オリエンテーリング大会を開催する。

→地方持ち回りの理由が過去、普及の観点で行われていた名残？と聞いています。もはや地方持ち回りは時代にあっておらず、また絶対条件でもないのに、この案には賛成します。ただし、トレイン固定でなく、開催エリアを競技人口及び運営者が多い、関東、東海、関西でのローテーション固定がよいかと思えます。

(4) 選手権クラス(Eクラス)とそれ以外の参加クラスで、全日本オリエンテーリング大会を分ける。Eクラス以外であれば、トレインの面積を小さくできる。Eクラスは、精度のよい地図が準備されているトレインを再利用する。

→反対です。分けてやるとトレインや運営者確保などデメリットが生じ、継続性が見込めないと思います。また、エリートだけの全日本選手権を希望するのは、いったい誰ですか。エリート選手でしょうか。他の一般参加者でしょうか。参加者視点での検討が甘く、多くの人に受け入れられない案かと思えます。

②WGの認識等について、以下の項目ごとにコメントさせていただきます。

(1) 本ワーキンググループが分析している全日本オリエンテーリング大会における課題点の認識に相違や抜けがないか。相違や抜けがあるとしたら、それは何か。

→まず、全日本のロングだけでなく、ミドル、スプリント、リレーと複合的に考えるべきではないでしょうか。広大なトレインが必要な点を除いては3種目も同様な課題を持っているように思えますが。リレーは地方持ち回り(国体がらみ)ですが、これは問題ないのですか。ミドル、スプリントは最近、開催始めたばかりですが毎年継続開催が困難な状況に陥っていると聞きますが違いますか？また、いずれも集客が悪く、競技コンセプトに耐えられないようなトレインを使ったり、運営不備があったり。毎年継続開催をする必要があるのですか。全日本ロングのみを改革しても、郵寄せが3種目や他の事業へくるのではないですか？

(2) 全日本オリエンテーリング大会開催継続のための提案。

→パブリックコメント方式でなく、実際に競技者へアンケートをとってみたいかがでしょうか。開催頻度、エリア、競技方式。WGメンバーだけで検討を先走って、何のメリットがあるのですか？JOAが競技者へもっとアプローチすべきではないですか？

→ロングだけでなく、ミドル、スプリント、リレーも含めた継続開催の提案を以下に記します。

4種目を毎年、異なるエリア、時期に開催すること自体がそもそも困難であることを認識すべきです。その条件での案です。

a-地方持ち回りの廃止、これに代えて関東、東海、関西でのローテーション方式

b-毎年の開催を見直し、いずれかの種目を隔年とする。

c-新規エリアやトレインにこだわらない、集客や収益も含めた開催。4種目を2日間大会、ミドル&リレー、スプリント&ロングなど複合的な開催を目指す。同様に継続開催のために様々な手を打っているインカレからのアイデア活用など。

- (3) 全日本オリエンテーリング大会に参加する選手から見た、本大会に対する要望。

→JOAはどんな全日本大会を目指しているのでしょうか。現状はとりあえず毎年、無理してでも開催しているようにしか見えません。

コースやトレインは良質なものがよい大会。競技規則にしっかり沿った、全日本チャンピオンを決める、多くの参加者が盛り上がる大会。と、勝手に思っているのですが、目指している大会ビジョンがあれば、参加者からの要望や提案も多くなるのではないのでしょうか。

(2015年3月20日)

競技者

クラス別の全日本大会は毎年開催してもらいたい。

そのためにEクラスだけ別にする。(分離することはしかたがない) Eクラス用トレインをある程度限定してもよいと思う。

(2015年3月29日)

競技者

全日本大会で使用した地図をパーマネントコースとして利用できないのでしょうか。SNS・インターネットを使い広告を実施し、家庭向け、ピクニック、ハイキングへの地図の潜在需要はあると考えますがいかがでしょうか。

(2015年3月30日)

競技者

まず、WG案の(4)には反対します。

この案だと現状のWOCセレと同じ位置づけのイベントになってしまい、セレでもないとなれば、さらに参加者は減るでしょう。

全日本ロングは、年1回の開催は最低限維持すべきイベントです。それは他の全日本ミドルや全日本スプリントより重視すべきだと思います。ですが、今の状況では、単なる地方大会のレベルと変わらない位置付けなのが問題点だと思います。

今回の福島県での開催だと、西日本の人間にとっては、遠すぎるから行かない大会、でした。逆に、伊豆大島大会は、遠くても高くても行きたい大会だったように思えます。

大会自体のステイタスをあげて、行きたくなる大会、参加して満足できる大会にするにはどうすればいいか、が問題ではないでしょうか。

良いトレイン+よい地図+速い計セン、は、どの規模の大会でもほぼデフォルトですが、さらに全日本でしかないようなスペシャルなこと、が必要だと思います。それはたぶん+よい演出、だと思います。オーリンゲンやWOC、あの会場の演出を全日本でも目指すべきだと思います。

速報をスクリーンに映すのと同時に、MCで実況するとか、エリートだけは隔離して、会場でGPS中継をするとか。ビッグスクリーンまでは難しいかもしれませんが、ここはやるべきでしょう。

もっとコストがかからないことで重要なのが、歴代優勝者一覧をプログラムに載せること。です。インカレプログラムには過去の記録が毎回載っています。それだけで、あのイベントを支える熱意が伝わっていく、十分な効果があるのです。

開催日程も変えるべきだと思います。

最もボリュームのある学生層が出やすい時期を選ぶべきです。3月末の開催は、学生にとってインカレ直後となり、モチベーションも

金銭的余裕も一番低い時期だと思います。インカレの時期が変わらないのなら、全日本の時期を動かすほうが参加者増が見込めると思います。

(2015年4月1日)

競技者

A. ワーキンググループでの、全日本オリエンテーリング大会開催における改革案について意見します。

I. シニアになってこれから徐々に体力が衰え、次がないかもしれない年齢層へと移行する立場から

- (1) 隔年開催には大反対です。2年後には命がないかもしれません。
- (3) ローテーションしても、コースパターンが違えば楽しめます。
- (4) Eクラスが別開催だと、日本トップの選手が誰なのか把握できないし、興味が持てないし、世界に行くと言われても援助する気になれません。

II. オリエンテーリングをする若者の親の立場から

- (1) 隔年開催には大反対です。今はインターハイがあり、中学生も競う舞台がありますが、やはり、小学生には全日本は絶対で、1年開くとかなり成長してしまいます。
- (2) ロングの競技の特性を知らない若い競技者が増え、海外とのギャップがもっと大きくなるのは少々悲しいです。ルートチョイスの醍醐味を親子でともに参加し楽しむレース環境が欲しいです。
- (3) ローテーションでも4年以上経てば成長段階で見方が変わるし、構わないと思います。
- (4) もし、Eクラスに出られる若者がいても、それを応援してくれる他人(家族以外の人)が会場にいなければ、張り合いがないし、友人間でも、E権の有無で、興味がずれてしまう弊害が大きいと思います。

III. 過去に日本代表選手レベルだった立場から

- (1) 現在は日本代表選手の選考に(参考程度にしか)使われていませんが、毎年開催されるWOCやJWOC代表に「私が今年の日本チャンプです」といえる人がいない年があるというのは変な感じがします。
- (2) 特にこのレースでWOC等の代表選手が決定されるのであれば、ロングの競技を維持するために、上位クラスは2マップ3マップを使っても構わないと思います。昔は、悲惨な状況(例えばシード無しとか)で代表を全日本大会にて選考していたこともありますよね。日本ではロング絶滅でいいのですか？海外の由緒ある大会でも、距離稼ぎでかなり走らせるだけということもあるではないですか。
- (3) ローテーションでも仕方がないと思います。あとはコースプランなど、他の工夫でカバーしていただけたらと思います。
- (4) Eクラス単独開催だと日本を代表する人達が、一般の競技者に認知されず、内輪で競っている感じになるのは、大変寂しい感じがします。

IV. 高校生からオリエンテーリングを始めて全日本大会に出場し続けている立場から

- (1) 隔年開催には大反対です。1年開催されないと、学年が2年進むことになってしまいます。生まれ年によって有利不利が大きくなります。
- (3) 10年経てばトレインの状況も大きく変化しますし、記憶も薄れるので、ローテーションもOKです。
- (4) 今でもEクラスの表彰の時、興味を持つ人がどれだけ居るでしょう。ましてや、別々開催になったら、Eクラス出場者と、一般競技者の隔たりがも~~~~~と開いてしまい、理解し

てもらえなくなります！

B. 全日本オリエンテーリング大会に参加する選手から見た、本大会に対する要望など

・インカレとの競合

大学生の時は、自分にとっての最大のレースがインカレとなる。現在、インカレがロング・ミドル・スプリントと細分化されて分割開催されるようになった。

全日本への参加意識を大学生に強調するには、インカレとの同時開催か、同じ種目の大会をできるだけ離して開催することが必要だろう。今後は、競技者二世以外はほとんどの競技者が大学から始めた経験を持つようになるため、大学生へのアピールは大変重要になると思う。個人最大のレースは年に2回回らないので、同時開催するののも一つの方法だと思う。

ただ、これがかかなり難しい場合、(A項の(4)の意見と大きく異なる提案であるが)選手権クラス大会+インカレも考えられる。この場合、福島全日本優勝者の尾崎は全日本かつ大学選手権者となるであろう。女性の場合、皆川が全日本、五味が大学の選手権者という形になる。大学生には良い刺激だろう。

・年齢別選手権

<シニア>

5歳刻みのクラス分割が最低限必要なものであると思う。特に50歳以上のシニアのクラス統合はかなり厳しい。10歳離れたら若い人の勝ちであろう。よって、①クラスは細かく分割するが、ウイニングタイムを少々犠牲にして、コースを同一化するような措置でコース設定の負担をわずかに軽減できるか？

<ジュニア>

小学生～中学生は知能や体力発達が著しいので、現在以上のクラス統合は無理であろう。コースも小学校低学年・高学年・中学生・高校生ではかなり差があるので、同一にするのは難しい。学齢上位の女子と下位の男子コースの同一化は可能だが。

<おおよそ大学生～40歳代くらい>

技術レベルより体力レベルの方が大きいので、年齢別というよりは難易度別選手権の色合いを濃くすることが可能だろう。

・スポーツツーリズム

これが楽しめるのは、余暇やお金に余裕のある人に限られる。私は年中行事の一つに位置づけ、どこで開催されてもなるべく家族で出掛けて、ご当地の食や文化・自然に触れるようにしているが、年度末開催が多い全日本に合わせて、余暇が楽しめない職業の人もあるだろう。

・広大なトレインと精密な地図

<トレイン>最近の競技レベルの向上と、ウイニングタイム設定の必要性から、広いトレインの必要性が求められているが、ロングレグのパターンが何本か確保できるのであれば、マップ交換をしながら距離を稼ぐ方法が可能だと思う。京大京女大会では2マップ方式で頑張っていたよね。

以前の地方開催全日本のことを考えれば、今の地図精度はものすごく満足度が高い。調査方法の進化による地図精度の向上が当たり前と言ってしまうまでも、地図精度を確保できないために、地方での開催が完全になくなってしまふことは、かなり残念だ。要項やプログラムでわざわざ地図精度についてコメントする必要はないが、日本の地図技術の現状(トップは高いが、裾野が狭い)事を事前に周知し、あらかじめ参加者に、調査・作図の評価値(調査経験回数や年数、マップ枚数等)を知らせる項目を設けるのはどうだ

ろうか。そして、ローテーション大会を「A全日本」というならば、地方で準備できたときだけ時々開催する大会を「B全日本」として、参加者にも現状での継続開催努力のベストパターンであることを理解してもらおうのはどうだろう。

以上

(2015年4月4日)

ディレクター2級

(1) 本ワーキンググループが分析している全日本オリエンテーリング大会における課題点の認識に相違や抜けがないか。相違や抜けがあるとしたら、それは何か。

⇒学連主催の大会(主にインカレロング)との統合などの検討が抜けていると思われるが、私自身はこの点について意見を述べる立場ではないので、指摘に留めます。

(2) 全日本オリエンテーリング大会開催継続のための提案。

⇒現在全日本ロングを行っている3月下旬には、全日本ミドルを開催し、「毎年開催の需要」「年齢別選手権としての需要」に対応する。全日本ロングは代わりに秋開催とする。これでスキー場等のトレイン利用の可能性が広がる。また、全日本ロングは日本選手権クラス「21E」とその予選としての「21A」クラス、ジュニア選手権クラス「20E」とその予選としての「20A」クラスのみとし、地図縮尺や距離の違う多数のクラスを運営する負担を無くす。

代わりに距離は長い難易度を下げた併設クラスを設定することで、トレイルランナーやOMMを目指す層の取り込みを狙うことは、運営の過度な負担増に成らない範囲で検討する価値はある。また、翌日に同じトレインを使ったロゲイニング大会の開催等で、採算性を上げる可能性もある。

全日本ロング開催の地方持ち回りは止め、関東・関西・東海でローテーションし、開催トレインをある程度固定化し、その中で複数年のローテーションで開催することも許容できる。(積極的な支持ではない)

個人的には全日本ロングの隔年度開催も許容できるが、この点は合意形成が難しいと感じるので、案として取り下げることを提案する。

(3) 全日本オリエンテーリング大会に参加する選手から見た本大会に対する要望。

⇒(2)に意見を採用すると、私自身は全日本ロングに選手として参加しなくなる。そのことよりも、日本オリエンテーリング界が発展する方を私は望みます。

(2015年4月20日)

競技者

- 全日本オリエンテーリング大会における課題点の追加(私見)
- 全日本オリエンテーリング大会に参加する選手から見た、本大会に対する要望

『日本選手権者に対する注目やリスペクトがない。日本選手権者にスポットライトをあて、若者が目指す価値を作りあげる。』

トレイルランニングだと鍋木毅さん、石川弘樹さん、山本健一さん、他にも最近ではプロのトップ選手も出てきて、そういう選手は一種のオーラがあったり、一般のランナーから一緒に写真を撮るとか、ファンがいたり、カリスマだったり、がある。

一方、日本オリエンテーリング界だと「村越さん、誰それ？」とか、例えば松澤さん、小泉君、番場さん、皆川さんとか、トップ選手の近くだと雰囲気が変わるとか、一緒に写真をととか、ないと思う。(競技人口やメディアの違い？ 海外のオリエンテーリング選手はどうなのでしょう？)

全日本大会で、選手権で誰が勝つかとか、他の参加者は興味なさそう。尊敬や憧れの対象でない。オリエンティアの多くが学生で、興味はインカレに向いている。箱根駅伝の弊害に似ている。(ただ、年配のオリエンティアでも、選手権での優勝争いは、興味なさそう。トレイルランニングと違い、自分が走ったコースと違うから、興味がわからないのか？)

全日本大会、日本選手権の意義。開催の目的は？
(年代別のチャンピオンを決めるという位置づけなのか？ であれば、自分のクラスの勝者には興味があっても、M21E、W21Eの勝者に興味がないのもうなずける。)

(M21E、W21Eについて)日本選手権を勝った選手が、そのまま世界選手権(ロング、ミドル、スプリント)出場の権利を得られる、とかで良いのでは。(それだけの明快な価値づくりをする。)

トレランの上田瑠偉選手(早稲田大学陸上競技同好会)は、前年度のハセツネ優勝者のメディアでの取り上げられ方が特別で、ハセツネで勝とうと目標を持ち、大会記録で優勝した。そのように、オリエンテーリング日本選手権者を、もっとメディアで取り上げると良い。取り上げるメディアが少ないのか。インカレを卒業した学生が、次のステージとして憧れ、目標とできる舞台は？

私にとって学部卒業後のインカレは、全日本(ロング)とハセツネ。

私にとって全日本のミドル、スプリント、リレーは魅力ない。なぜか？ 歴史？ 勝手なステータス？ (ミドルやスプリントは、遠征にかかる労力に対して競技時間が短い。あと、クラシカルな日本選手権としてロングに最もステータス(価値)を感じている。)(なぜ日本選手権のミドルとスプリントにはステータスを感じないのか。歴史と、他のトップ選手が「本気」で来るかどうか。)

ロングが好きだし。いろいろ不備はあっても、全日本ロングの開催を続けてほしい。そこには村越真の15連覇や22勝があり、鹿島田浩二が連覇を止めたとか、そういう歴史を今も感じたいし、語り継ぎたいからか。

『日本代表選手の強化の観点。開催時期。
選手が本気で走る舞台を。』

現状、全日本選手権(個人戦)は、ロング(3月)、ミドル(秋?)、スプリント(秋?)の3つある。世界戦を目指す選手にとっては、3-4月の国内選考会と7-8月の世界選手権が大きなターゲットとなる。近年の代表は大学生も多いので、彼らは10月のロングと3月のミドル・リレーもターゲットとなる。よってインカレロング後の10月後半(インカレがなければ9月)~2月くらいは、オフ、鍛錬期、調整の期間に当てたい選手も多いのでは？ となると、全日本選手権のミドル、スプリントは、3~6月くらいに開催するのが良い？

日本トップ選手が、全日本選手権の、ロング、ミドル、スプリントを、どれだけ本気で走っているか。練習レースの一環で走っていないか？ 日本代表選考レース>>日本選手権という優先順位

位になっていないか？

(再掲)

日本選手権を勝った選手が、そのまま世界選手権(ロング、ミドル、スプリント)出場の権利を得られる、とかで良いのでは。(それだけの明快な価値づくりをする。)

- 全日本オリエンテーリング大会開催継続のための提案(私案)
例えば、スプリントとロングをセット(土日)で日本選手権(全日本)を開催。ミドルの日本選手権(全日本)とクラブ7人リレーをセットで開催。(全日本リレーは場合によって廃止も検討。リソースの選択集中と集客の観点より。)
開催時期は3~4月とし、世界選手権日本代表選考会を兼ねる(選手権者は代表の権利を得る)。
選手権クラスは、参加費を値上げしても良いと思う。
選手権者にスポットライトを当てる工夫。
メディアの充実。(オリエンテーリングマガジン以外にも、複数のメディア媒体)

(2015年4月21日)

競技者

全日本に参加してもクラスは70Aですが、競技者としてのOL歴は11年にしかありません。大会開催する側の経験はクラブに入ってから6年間のみです。その経験も地域大会までであり、しかもあれこれの指示で動くだけでしたからパブリックコメントをいうだけの資格があるか自分でも怪しいと思います。OL界には若輩ですが今までの体験からいささかの意見を申し述べます。

世界選手権が毎年開催されるのであれば、全日本大会も毎年開催されるべきではないでしょうか。隔年開催では、非開催年の日本代表をどういう基準で選考するのですか。世界選手権日本代表選考会という意味合いはありませんか。

名称を全日本大会から、日本選手権大会に変更してはいかがでしょうか。ロングオリエンテーリング日本選手権大会、ミドルオリエンテーリング日本選手権大会、スプリントオリエンテーリング日本選手権大会に変更する。

選手権大会では、10kmから1kmまでのコースは必要ではない。現在全日本大会としているから、Eからファミリー、B、Nまでとコースが多くなっている。ファミリー、B、Nは、地域大会程度までと割り切りが必要だと思います。

日本選手権大会ロング大会は、協会直轄で実施するというのはどうでしょうか。

もちろん直轄と言っても人手がないから計画は協会、人手は東北、関東、中部、関西といったブロック内県協会共同で出し、トレインを持ち回り実施を考える。

単一の県協会実施では、できる協会が限られてしまう。

トレインは、まだ発掘できるのではないのでしょうか。

国有林を主とした公有林、社有林、大学の演習林、例えば自衛隊演習場等、またオリエンテーリングが盛んではない地域なため今まで使用されることがない県市の森林公園等利用の交渉が比較的容易と思われるトレインはないですか？

競技者を増加するに、自衛隊に競技を積極的に売り込みを図ってはいかがでしょうか。

オリエンテーリングの始まりは軍の訓練からと聞いています。しかし自衛隊はあまりやっていないようです。私的な話ですが私は元

航空自衛官です。野外訓練と称して富士登山、海岸キャンプ、長距離行進等やりましたが、オリエンテーリングのようなことは経験ありません。走ること自体は半ば義務になっているように走ります。富士登山マラソンはいつも自衛隊チームがたくさん出ています。上手く売り込めれば、演習場のトレイン化も容易になるとは思いますけどうでしょう。

また大学競技者もライバルが多くなり競技者の競技力の向上にもつながるとおもいます。自衛隊員は走力では負けていないと思いますが、マップの読みナビゲーション力で負け、総合で負けるでしょうが。

ロングはしてやらなければならないと思います。

ミドル競技勝者でもって世界のロング大会で戦ってこいはちょっと大変かと思えます。数か所のロングトレインで大会を持ち回りにすれば、大学生競技者であれば在学中全部は回れないですし、社会人競技者でも前回使用時の記憶で走るといっても数年に一度ですから「慣れたホームトレインで有利」とはならないでしょう。トレインを数年に一度というのはマップ作製は新規作成と同じ程度になりかねませんが。

ロング競技に公平な競技のため精密なマップが必要でしょうか。

競技者全員同じマップですからそれはないと考えます。マスターマップ時代の程度のマップまではちょっと手抜きですが、全般をロゲイン程度のマップとして、コントロールが集中するトレイン内の必要な部分区画についてだけは精細にマップ化するというのはいかがでしょうか。マップ作製費用が少なく済みます。

以上ありきたりのことを述べてしまいましたが、参考になればと思います。

(2015年4月23日)

競技者

(1)の課題点の認識について

- ・年齢別選手権としての需要
すべての年齢層が参加しやすいように、とくに未成年、若手の育成の視点
- ・地方持ち回りの需要
地方での普及、認知度の向上、地方の活性化の視点
- ・収益性の問題
大会開催により、少しでもJOAの収益が出るための工夫

(2)の大会継続のための提案

WG提案の4案が現実的と考えます。それに基づいて、「全日本年齢別」大会と「全日本選手権」大会に分けて、それぞれについて考えてみました。

・開催時期

「年齢別」:すべての年齢層、特に小中学・高校生でも、家族で参加しやすい時期に。具体的にはGWや夏休み。3月は異動など多く、不向き。

「選手権」:WOCやJWOCの選手選考会を兼ねることになるので、3月～5月くらいが良いか。宿泊なども含め、選手権を目指す人にフレンドリーな運営を目指す。

・トレイン

「年齢別」:全国に広くアピールするために、出来るだけ全国持ち回りとし、地方での活性化を図る。トレインの質、地図の質に関しては、甘いものであっても許容する。ミドルディスタンスで行うとした場合、「テクニカルを重視する」というコンセプトを満たさない場合もあるが、ある程度許容する。

「選手権」:競技性の高さを最優先とする。交通の利便性もある程度必要。ある程度の固定化もやむを得ないが、新しいトレインの開拓、チャレンジも必要。

・収益性

「年齢別」、「選手権」とともに、地図作成などになるべく経費をかけず、複数日にしたり、併設イベントを開催するなどにより、参加者数の増加が見込める大会とする。

「選手権」に関しては、競技性の維持の点から、地方に任せるのではなくJOAの直轄とし、運営に関わる人的、金銭的な簡略化をはかる。

(2015年4月27日)

都道府県協会会長

1 現状分析から

これまで実施してきたようなブロック・県での持ち回りは、大会運営を経験し、トレインを開発するなど一定の意義があるが、一方で、運営が大変な県もあることも事実である。しかしながら、この方式を崩せば、オリエンテーリング人口の偏在化がますます進むことも考えられる。そのため、ワーキングチームで現状分析がなされてきているが、そこでの課題からは、人材面、財政面、トレイン面の3点が挙げられると考えられる。

2 人材面の解決策の一つとして

スタッフの確保については、県協会が高齢化しスタッフのなり手が少なくなってきていることから、県協会だけで実施することなく、学生や近隣の県、あるいは広く全国に呼びかけスタッフを確保できる体制づくりができるようにする。

また、持ち回りブロック制度についても、各地のオリエンテーリング人口等の現状に照らし、見直していくことも考えていく必要がある。

3 財政面(トレイン面も含む)の解決策の一つとして

持ち回りにおいて負担となる大きな点は、トレインの地図調査の労力や作成経費負担の面がある。昨今のインカレは1000人近い規模の大会に復活しつつあるが、一方、全日本大会は、それを下回る参加者となってきており学生の参加も少ない。ほぼ同時期に開催されることもあるが、インカレと合わせて全日本大会を開催することで、参加者の確保と費用の軽減を図ることができるのではないか。多くの若い参加者が大会に参加することは、大会を盛り上げることにもなり、また、一緒に大会運営を行う事は、将来的なオリエンテーリング運営においてもプラスとなる。

4 トレイン面の解決策の一つとして

全日本大会をインカレの大会と合わせて行う事と同時に、一度作った地図を将来的にも活用できるようにすることで経費を抑え収益を上げることが考えられる。例とするなら、愛知世界選手権の三河のトレインや岐阜の椈の湖などのように後々まで長く活用できるようなトレインを開拓し確保していく。そのためには初期投資は必要なものの、プロの指導やプロに委託して、後々まで使い回すことを前提にした地図作りをしていくことが大切である。各県が全日本大会(ロング)を実施できるようなトレインを最低一つずつ持てば、各県協会数分のトレイン(20県とした場合、20トレインで20年間は実施可能)を持てるよう計画的な整備を行う。

5 さまざまな工夫により収入の確保をはかる

最近、様々な取り組みに対してネットを通じて寄付を求めるクラウドファンディングが行われるようになってきているが、オリ

エンターリングのPRをして趣旨に賛同する人からこの地図作成などの経費を寄付として募ることも考えられる。

ロングの大会については、経費的にもマラソン大会並みのレベルにあり、エリートクラスなどの参加料の見直し、最終的に他の大会を含めて全体をマラソン大会並にしていけることも必要と考える。

以上
(2015年4月30日)

指導者

M/W18とM/W15に秋口のインターハイと同じくらいの参加者がいるといいと思います。春と秋に目標を持たせるのは、とてもリズムが良いです。

その一つにタイトルなどの特典を与えることがいかに昔ながらに思っています。それはもちろん「公のタイトル」となるからです。

現状、中高生において公のタイトルが無いことは、他競技と比較される学校内に身をおいていると、とても残念に思うことが多いです。インターハイ実行委員会と継続的に連携していただくことも大切だと感じています。

中高生は、遠征費がネックになるので、毎年「富士(現在の中高生勢力の中央地域)」での開催を希望します。それできれば日帰りできる日程だと助かります。新富士駅などからのバス輸送を駆使していただいて。

ジュニア選手権クラス20Eは、大学生へのチャレンジの意味合いで大切だとは感じていました。しかし、M/W18参加者との兼ね合いが難しいのが現状です。(※東海では20E権取得者のみを、経費学校全負担で参加させています)

またJWOCセレが全日本前後に設定されることが続いています。日常の公認大会で20E出場権利を得るのが難しい現状において、全日本で大学生にチャレンジしようとしなくても、セレでチャレンジすればいいと中高生ともども感じ始めています。U20強化策、JWOC選考方法との連動が必要不可欠だと感じています。

リレーでは15歳以下クラスができましたが、ミドルやスプリントにおいても、またトレイルにおいても中高生を称えるシステム創設を希望します。またいずれも、富士での開催を希望します。中高生は全国各地へ観光ついでにいきたいということはありません。

逆に、甲子園のように「聖地」として富士ですべてを決するほうが分かりやすいと思っています。

(2015年4月29日)

競技者

【問題の背景】

今回の問題の背景は、非常に明確である。そしてあらゆるスポーツ競技に共通している。競技者の漸減と、高齢化である。特にオリエンターリングに問題が顕在化しているわけではない。また、国内スポーツが海外の流れに沿ってない。これも実はあらゆるスポーツで問題となっている(ガラパゴス化である)。

【全日本ロングの問題】

もし世界的なロングの流れと比較するならば、ここ15年間ほとんど変化を起こさなかった日本の体制や考え方に問題があると考えられる。IOFは2000年Leibnitz Conventionの採択から、オリエンターリングは競技性よりも開かれた競技を目指すことを決め、様々な取り組みを実施してきた。主としてArea Conceptの導入、MC導入や演出の構成、Flower ceremonyや速報掲示、やクラス分けからスタートオーダーまで、その検討項目や実施成果は多岐にわたり様々な

形で報告にまとめられ実践されている。一方でこれらの流れを全くと言っていいほど、JOAや頻りに海外に行っているナショナルチーム関係者は、学ぼうとしてこなかった。正に(もしかしたら)誰も知らないのである。

今回、パブコメをしていただいているWG関係者は学んできたのだろうか。

フット競技規則を見ればなんと書いてあるだろう。例えば、

Appendix 2: Principles for course planning

2.3.5 Media and spectators

3.11.5 Avoid over-complicating the route choices Appendix 5:

The Leibnitz Convention Appendix 6: Competition Formats

3 LONG DISTANCE

3.1 The profile

これらは(ごく一部だが)、2000年当初に問題となったワールドカップやクラシックの問題への反省から、様々にわざわざルールへ書き加え反映されてきた項目である。

これらの経緯等を学んできたのか、WGメンバーはその背景を知っているのか大変疑問を感じている。

全日本ロングにニーズや魅力が乏しくなっているとすれば、それはそもそも競技運営形態の問題が根本である。海外に普通にあるべき姿を何も実践できずにいる。

【海外ケーススタディ】

全日本オリエンターリング大会開催継続のための提案として、まず(2)特に(4)はありえない。ありえないと考える理由は、海外でそのような事例を見聞きしたことがない。

「こうすればうまくいく(はず)」と考え、実践して上手くいくケースなど見たことがない。ケーススタディを持たず、プロコン分析が全く足らず実施し、より大きな欠点が顕在化することは、何事にも共通する失敗の基本である。

事例を挙げる。

例えば海外では、有力な大会の地図は、複数回の選手権に使用されるのが一般的である。

大国ノルウェーですら大きな大会はすぐに次の選手権等にリザーブされている。例えば国内で実現するとすればインカレで使った地図は、選手権エリート選手向けには1-2年間Embargoにする等、一番簡単な全日本選手権を開催できる事例である。

実際に海外頻りにある事例である。なぜ選手権だけ分離開催など考えるのか、検討や勉強が足りないと思われる。

【ロングディスタンスとは】

Appendix 6: Competition Formats 3.1 The profile に書かれたように、ロングはルートチョイスとエンデュランスを試されるフォーマットである。極端にいえば、森を走る必要すらない。難しいレグとコントロール位置など不要なのである。

ほとんど道走りでも成り立つフォーマットであり、むしろショートロングディスタンスと揶揄された2000年前半傾向は絶対に止めるべきという考えがIOFで主流でなされ、その方向付けをルールにわざわざ各所に明示的に盛り込むなど苦労してきた。

つまり、日本で可能性が悪い山林でも道の分岐に置いて十分に競技性を確保できる形態なのである。実に調査もミドルに比べ楽である。(今回の福島全日本はルートチョイスを試されておりある意味良かった、もっと道走りだけでも良いのである)。

斯様な方向付けを全くといっていいほど、国内の誰もしてこなかった。1:10で開催するくらいなら、道走りコースで演出に力を入れるべきなのである。(2)のようにIOFが歩んできた道のりと真逆の提案が出てくるのは、正直WGは誰もこの15年IOFの議論等を見てこなかったのかと驚いている。

【年齢別選手権としての需要】(おまけ)

年齢別選手権としての需要分析も大変おかしなものだと考える。

例えば、大半の競技人口を抱える 21 は 35 まで一つしかない。各国は 18, 19, 20, 21, 26, 30, 35 カテゴリは珍しくない。スウェーデンは競技人口の多い 50 歳代は、50, 52, 54 と刻む例もあるくらいである。それぞれは同じコースであったりする。IOF は、マスターズ等のクラスカテゴリの議論の上で、出来る限り Reasonable に！、表彰台に登る選手を多くする考えをルールやガイドラインに反映させている。そのあたり WG メンバーがどう考えているのか、全く見えていない。現状の日本のクラス分けや実施の手法について正しい問題意識を持っているように見えてない。

【まとめ】

色々書いてきたが、私の考えを2つにまとめる。

(1) ロングの改革は拙速なことをすべきでない。おそらくどれも失敗する。むしろ統合やテレインリザーブでの利用などを積極的に考えるべきである。

(2) ロングは IOF が苦勞して歩んできた道のり、たとえば演出等に力を入れて、より魅力的な競技の確保に力を使うべきである。

日本は海外ケーススタディ全く勉強不足で、だれもそれを行ってこなかった。極端にいえば、森を直進する必要は高くない。地図のコストなど問題となるなら、下げるべきである。

(おまけ)

スプリントは、非常に超簡単にすべきというのが、現在 IOF の目論みである。国内のスプリントやフット関係者はその流れを追って、何らかの試みや啓蒙につなげることができているのだろうか。全くできていないように見える。

やるべきことは、独自の失敗につながる考えを巡らすよりは、ケーススタディにしっかり背景も含めて学ぶことだと思われる。

(2015 年 4 月 30 日)

競技者

要約

本提案の要約は「オリエンテーリングの楽しさをうまく魅せて、広告宣伝費と新しい競技者を集める方策を各々で試してみよう」、ということです。

A. 日本のオリエンテーリングを維持・発展させるには広告宣伝費の獲得が必要

全日本オリエンテーリング大会を考えるワーキンググループの「パブリックコメント募集について」で挙げられた課題は、全てお金で片付く問題に見えます。極端な話をすれば、JOA が全日本大会の費用として毎年 2,000 万円支出できれば、挙げられた課題は解決できるのではないのでしょうか。地図調査のプロフェッショナルやイベント運営を業務とする会社に適切な代価を払って依頼することにより、都道府県協会の負担は大幅に軽くなります。「余剰金は各協会の収入」と認めれば、全日本大会開催の引き受けは途切れることもないでしょう。

問題は参加費収入では十分な支出を賄えないことです。北海道で開催した 2006 年度全日本大会は、36 万 6 千円の予算(参加費から 26 万 6 千円、JOA から加算金 10 万円)で地図作成・運営を実施したので、お金が無いことはよく理解しています(大会 1ヶ月前に 30 万円増額されましたが、企画的には後の祭り)。ワーキンググループの「全日本オリエンテーリング大会の現状」には予算規模は 200 万円程度とありますが、実際に主管する協会に提示される予算は 9 年前の時点で 40 万円を割り込んでいました。

これに対する対応は大まかに二つに分けられます。

- (1) 支出を減らす
 - (1-1) 費用を値切る・無償ボランティアを募る
 - (1-2) 規模縮小(仕事を減らす)
- (2) 参加費以外の収入を増やす(オリエンティア以外から資金を引き出す)
 - (2-1) 見返りの無い収入(補助金・寄付)
 - (2-2) 便宜提供の対価としての収入(広告宣伝費)

(1) 支出を減らす
現状からの財政緊縮はどのような方法であっても、参加者の減少・競技の衰退に繋がる悪手だと考えます。

(1-1) 費用を値切る・無償ボランティアを募る
ボランティアだけで高いレベルの競技性を成立させる要請に応えるには限界があります。そして高いスキルを売るプロフェッショナルとして身を立ようとする人材も安定した収入が見込めなければ減ります。

(1-2) 規模縮小(仕事を減らす)
大会の隔年開催・地図調査時間の制限など大会開催の実作業量を減らすことによって支出を抑えることは、競技への参加機会を減らす事あるいは競技レベルを下げる事に直結します。

いずれも競技の衰退に繋がる悪手です。第 100 回全日本大会を盛況で迎えることを目指すのならば、収入を増やす方策を模索するしかないでしょう。

(2) 参加費以外の収入を増やす

(2-1) 見返りの無い収入
昭和のオリエンテーリング普及期には行政からの補助金および行政職員の運営協力が大きな力になっていました。当時はグループクラスが主流で「誰もが手軽にできる」点が行政への要請(幅広い層の市民が恩恵を享受する)と合っていました。しかしスポーツの常として、「運の要素を排除して、努力した者が正当な評価として勝利をおさめる」という方向にオリエンテーリングも進化してきました。競技性を高めるというのは正しい方向だったと思います。こうして「お遊び」から「スポーツ」に脱皮する過程で大会運営の大部分の労力がエリート層に振り向けられることになり、徐々に行政の関与および資金援助が減少してきました(無くなった訳ではありません)。現在ではかつてのオリエンテーリングの位置をポールウォーキングなどが務めているように見えます。このような状況ですから、補助金による収入を大幅に伸ばすことは期待できないでしょう。(参加者が多くなり・幅広い層に広がれば多少の回復はあるでしょうが、最上位クラスの競技性を確保するための支出はあまり歓迎されないでしょう)

見返りを求めない純粋な寄付は個人の善意に基づくものであり、継続的・安定的な収入として期待してはいけないう性質の資金です。

(2-2) 便宜提供の対価としての収入

言うまでもないことですが、メジャーなスポーツの収益は参加費・観戦費よりも多くを広告宣伝費から得ています。競技者が競技に専念するためだけではなく、高いレベルの競技環境を提供するためにも広告宣伝費による収入は使われています。この流れはオリエンピックがプロフェッショナルな競技者に開放された 1980 年台以前から続いています。

私達、日本のオリエンテーリング関係者は、使うために収益を増やすこと、に鈍感すぎでした。

言い訳は二つあって、一つは「お遊び」から「スポーツ」に進化させるのに夢中で余力がなかったこと。もう一つはオフセット印刷から CAD によるプリンタ印刷・航空写真図化原図から無料のレーザー

測量データによる原図・手計算による成績処理から e-Card による成績処理、などに代表される技術革新により高精度化・省力化しつつ必要経費が下がるという恩恵を受け続けてきたため、補助金離れによる収入の漸減がまるで気にならなかったことです。

しかし技術革新によるコスト削減も限界に近づき、IT 化できない人件費が目立つようになり地図作成費が目目されるようになったというのが今回のパブリックコメント募集の状況でしょう。

日本におけるオリエンテーリングを維持・発展させていくためには、他のスポーツと同様に広告宣伝費の獲得が必須でしょう。

B. IT 技術を使ってオリエンテーリングを魅せるスポーツに

広告宣伝費の獲得を目指すとして、一体どのようにすれば広告が集まるのでしょうか？

実際にスポンサーとなる企業と費用の折衝をするのは JOA 役職者や大会役員などの肩書きを持った少数の人になります。その他大勢のオリエンティアには収入獲得に関してやることは何も無いのでしょうか？ そんなことはありません。折衝に向かう我々の代表者に「交渉の手札」を持たせてあげることが出来ます。具体的には「広告スペースの開拓」「見せるコンテンツの開発」です。

また、オリエンテーリングを「魅せる」ことは、収入を増やすと同時に競技初心者の勧誘にもなります。これもまたオリエンテーリングの発展には重要です。

B-1. 広告スペースの開拓

「何人に見てもらえるか？」で金額が決まるのが広告宣伝費です。いまずぐに広告宣伝費の対価として提案できるのは、選手のナンバーカード・地図・プログラムのスペース提供、会場周辺への看板掲示などでしょうか。これだけの「手札」では大会運営費を賄うだけの収入を獲得できません。会場に広告看板を建てても、地図に広告を印刷しても、目にするのは参加人数に限られるからです。

やはり画像メディアに記録して公開し、大会会場に来ていない多くの非参加者にも見てもらわなければ多額の広告宣伝費は望めません。誰もが眼を向ける映像に価値を見出すのが広告です。そこにコマーシャルを自然に溶けこませることが大事です。撮影後に編集により宣伝を入れ込むことも可能です。しかし競技と一緒に映り込むようにすれば(例えば報道などの)第三者が撮っても宣伝効果を見込めます。スポーツ中継では一般的な手法です。その点では、注目度の高いフラッグ・パンチ台周辺が一等地になります。選手が胸に付けるナンバーカード、競技の状況説明に必須の地図表面も同様です。

競技性と広告のバランス

これらの注目ポイントに、どのような形で広告スペースを取るかは試行錯誤になります。

広告主の希望は当然に「大きく、はっきりと」ですが、競技性とのバランスは重要です。コントロールフラッグの背後に小屋サイズくらいの大きな看板が建っていたら、フラッグより先に見えてしまいます(まあ、人工特徴物として表記する手もありますが…)。地形特徴物よりも目立たずに、かつフラッグが見えると同時に認識できる広告サイズ・配色はどの程度か？ 地図表面に占める広告の比率はどのくらい許されるか？

パンチ台のユニットのすぐ横はヘッドカム画像では確実に映り、遠くからは目立たないので有望なスペースかもしれません。

これらのバランスは机上の議論では無く、実際に試してみるしかないと思います。そして宣伝の都合で競技性を歪めてしまわないようにオリエンティア主導で試行し、テスト画像を携えて広告主に提案して価値を認めてもらうのがよいでしょう。

ノウハウの共有

また、運用面でのノウハウの蓄積も同じく重要です。

側面に大きく「Silva」と染め抜いたフラッグを見たことがあります。広告で同じことをしてしまうと、スポンサーが変わるたびに作り直さなければなりません。ステッカー式にしたいところですが、布に貼って脱落せず、水濡れに強い物の情報などはノウハウとして共有すべきです。

これらは年に数回の JOA 主催大会だけでは試行回数が足りません。一般の大会でいろいろと試行錯誤し、有志グループが情報を集めて検討・ノウハウ公開し、JOA がルール化するの望ましいです。

また公開を前提に映像を撮影する場合、参加者の肖像権に関してもルール化が必要になるかもしれません。

B-2. 見せるコンテンツの開発

私達、日本のオリエンティアはオリエンテーリングを「見せる」ための努力をほとんどしていません。

しかし、いま動画の制作は容易になっています。これからはオリエンテーリングを「見せる」ための技術を、Malka2 による成績処理や OCAD によるコース印刷と同程度に手軽に直観的に出来るようにしましょう。それにより、さらに判りやすい「見せる」ための工夫が進みます。IT 技術を今度はオリエンテーリングを「魅せる」ものにするために使いましょ。

報道取材と動画制作

YouTube などに代表される動画は、パソコンだけではなくスマートフォンでも見られるようになりました。テレビと同程度に手軽で、マイナーなタイトルを探して視聴する場合はテレビよりも容易です。ですからコンテンツを公開する手段としては動画制作を中心に考えるべきでしょう。

しかし TV ニュースの報道はいまだに影響力があり、大会運営においては対応を考えておく価値が充分にあります。

報道取材と動画制作では撮影から公開までに要する時間が大きく違い、これによりその特性は異なっています。

報道取材
速報性に優れる
放送局(非オリエンティア)で編集、オリエンテーリング関係者は素材提供
動画制作
迅速性に欠ける
撮影は大会に限らない
凝った編集に時間を掛けられる
取材対応

オリエンテーリングは残念ながらマイナーなスポーツなので、大会運営者から依頼しなければ取材されることは無いでしょう。しかし、これからは取材対応の準備を整えた上で積極的に依頼をおこなっていきましょう。(広告宣伝費を獲得するためです)

取材対応の準備としては、(1)撮影ポイントの選定、(2)提供素材の用意が考えられます。

(1)撮影ポイントの選定

オリエンテーリングの特性を報道してもらうためには、やはり森の中のコントロール周辺での撮影は必須でしょう(会場・スタート・フィニッシュの絵も大事ですが…)。事前に見栄えの良さ・撮影スタッフのアクセス・撮影時間帯(選手が通過しなければ迫力がない)などを考慮して撮影ポイントを選定しておくべきでしょう。そして当然そのコントロールには広告が仕込まれています。

(2)提供素材の用意

報道では取材時間が限られるので、大会運営者がそれを補う映像素材を提供するのも歓迎されるのではないかと思います。特に試走ランナーにヘッドカムを付けて走らせた動画などは取材スタッフでは撮れない絵なので喜ばれるのではないのでしょうか？

動画制作

仕事・趣味で映像を扱ったことがないので詳しくはありませんが、オリエンテーリングに特化した動画制作には以下のツールが有効だと思います。

固定カメラ

ヘッドカム

頭部に固定する小型カメラで、装着者に近い視点で記録

GPS レコーダー

トラッキングデータとして通過地点・時刻を連続再生

固定カメラは安定した撮影ができますが、一人の選手が映る時間は高々10数秒でしかありません。その点、ヘッドカム画像は「選手が何を見たのか？」が連続して記録されます。どのタイミングで地図を見たか？ いつコントロールに気がついたか？ などの選手の主観を読み取れる映像素材です。逆にGPSトラッキングデータは客観的に各選手の動きを比較できる資料になります。

オリエンテーリングの特性を判り易く見せるには手段としては、これらは欠かせないものと思います。

運用課題

大会での撮影を考えた場合、選手権クラスのものに限ったとしても全選手に装着するヘッドカム・GPSレコーダーを揃えるのは難しいでしょう。現実的には一部の選手に了解を得て装着してもらうことになります。装着には(多分)メリットは無く、重量増・違和感というデメリットを生む可能性があります(無いかもしれませんが)。

これが「競技の公平性」の問題とならぬように事前に解決しておく必要があります。

できるだけ違和感を感じさせない装着位置・装着方法

慣れにより装着感は消えるか?の検討

(難しいと思うが)装着による差異を数値化できるかどうかの検討

「ルールによる装着の義務付け」では無く、選手権に撮影を導入する前に十分に試行を重ね、『順位が変わる程の影響は無い、という共通理解』を確立して導入するのが望ましいと思います。

ノウハウの蓄積

私個人は動画を見るのは好きですが、動画を編集したことはありません。ヘッドカムにせよGPSにせよ「動画に出来る」ことは知っていますが、「どうやったら出来るか?」、ましてや「どうやったら綺麗に出来るか?」は分かりません。私達、日本のオリエンテーリング関係者はほぼ同じようなもので、団栗の背比べ状態でしょう。

これを何とかするためには、皆が得た経験・知識をノウハウとして共有し集めておくことが早道でしょう。

ヘッドカムのブレ補正方法

GPSトラッキングデータと地図画像の同期方法

...

C. 最後に

JOAは数年先にも全日本大会の開催破綻が予想されるまで来ており、目先の難問が山積みでしょう。もちろん破綻を回避することは絶対条件です。

しかし同時に破綻を超えた将来の方向性、つまり「魅せるオリエンテーリング」を目指すことを示し、方針がブレないことも大事です。

そして、「魅せる」と「競技性」のバランスを取るための試行錯誤を認め、主体的に均衡点の判定に関与していくことも、JOAに求めます。

(2015年4月29日)

オリエンテーリング関係者

【仮説】

・全日本大会の基本コンセプトとして掲げられている4つのうち、最も重要性が低いのは「地方持ち回り」ではないか。
→他はいずれも確実に需要があるが、これだけは明確な需要があるように思えないし、デメリットが大きいと考えられるため。

・「金銭的収益はない」とは言えないのではないか

→「まともはこの範囲の地図を準備したら¥200万ではとても足りない。」と書かれているが、これは異議あり。

【上記踏まえた上で継続開催への提言】

例えば、地方持ち回りで運営まで全部任せきるのではなく、テレインの誘致、地元渉外、地元官公庁・協賛企業への協力要請など、地元にしかならない部分だけ協会なりブロック単位でお願いをすれば、少なくとも地方の負担は大きく減ります。そして運営は、一定以上の黒字が出せるのであれば、エキスパートな運営人材を集めて運営してもらおう、ということも可能性が出てきます。

(2015年4月30日)

都道府県協会理事

- (1) 本ワーキンググループが分析している全日本オリエンテーリング大会における課題点の認識に相違や抜けがないか。
 - ・金銭的収益はない …例えばインカレのプログラムに掲載される広告のような、協賛の募集や依頼を行っていないからであるとする。
 - ・毎年開催の需要 …毎年開催の継続は強く求める。隔年開催という案もあるが、スポーツの国内選手権は1年に1回開催されるのは当たり前、常識であるとするし、特に18歳以下のジュニア選手に、目指すべき大会である全日本を2年も待たせることはできない。

本大会の予算について 予算を増やす有効な施策は見つからない。…予算を増やす方策について、JOA 地図委員会が「家庭用プリンタを用いたオリエンテーリング用地図の印刷に適した用紙」と認定している「スーパーファイングレード厚みしつかりタイプ」を生産しているコクヨ、ならびに家庭用プリンタを製造販売しているキヤノンおよびエプソンにオフィシャルスポンサーを打診しているのか。していないならば、その理由は何か、説明を求めたい。

- (1) 開催頻度を変える。たとえば、隔年度の開催とする。…前述したとおり、毎年開催を強く求める。
- (2) 全日本大会をミドル・ディスタンス競技とする。その結果、ロングディスタンス競技に比べて狭いテレイン面積で実施する。…あえて「全日本をミドル・ディスタンス競技とする」とせずとも、ロングとミドルの区別なく「フォレスト」としての全日本開催とすれば良いのではないかと考える。E や 21A クラスは2マップでロングとするという手も取り得る。
- (3) 開催テレインをある程度固定化し、その中で複数年のローテーションで全日本オリエンテーリング大会を開催する。…実現可能な方策と考える。

(4) 選手権クラス(E クラス)とそれ以外の参加クラスで、全日本オリエンテーリング大会を分ける。E クラス以外であれば、テレインの面積を小さくできる。E クラスは、精度のよい地図が準備されているテレインを再利用する。…「国内トップ選手とベテラン、ビギナーの小学生が同じ時に同じ場所で競う」という点は、他のスポーツには無いオリエンテーリング大会の素晴らしい側面だと考えているので、分割開催には否定的である。

(2) 全日本オリエンテーリング大会開催継続のための提案。
・2005年の世界選手権のように、地元の企業や商店、宿泊施設等へ協賛依頼を行う広報・営業担当者が配置されることが望ましいと考える。ただしオリエンテーリング関係者で「営業」ができる人材は多くはないと感じている。
・全日本ロングを毎年開催するなら、全日本ミドルと全日本スプリントは隔年開催でも良い。特に全日本ミドルは「勝つと凄い」感じがあまりしない。
・全日本ロングは静岡、愛知などの主要テレインやマンパワーがある地域でローテーション開催するかわりに、全日本スプリントはその他の地方で開催するという案もあり得る。オリエンテーリングの全国大会を開催するという理由があれば、都市部よりもむしろ地方の集落の方が通行止めにしやすいのではないかと考えている。
・マンパワーと経費削減のために、「フィットネスO」を廃止する。

(3) 全日本オリエンテーリング大会に参加する選手から見た、本大会に対する要望。
・大会名を「全日本オリエンテーリング選手権大会」とすることを求める。現状の「全日本オリエンテーリング大会 日本オリエンテーリング選手権(ロングディスタンス競技)」という言い方は非常にややこしくて、対外的(地元、メディア、スポンサー等)にも分かりにくいのではないかと感じる。
・年間実施されているワールドランキングイベントの費用対効果を定量的な視点から分析し、公表されることを望む。
・クラス分けについては、30～60代については公認Sで実施されているような10歳区切り+A・Bクラスの設置が望ましいように思われる。Bクラスは20歳ごとに区切っても良いかもしれない。Aクラスには日頃からトレーニングを積んだものが出場すべきであるが、それほど準備をしていない参加者もある。難易度は下がるもスピードを維持して走れるBクラスレベルのコースの需要はあるように感じる。

(2015年4月30日)

愛知県オリエンテーリング協会

「全日本大会は日本のオリエンテーリング初期からの伝統的大会であり、日本のオリエンティアが一堂に会するお祭りのような意義ある大会である。従って、以下のとおり当協会としてコメントさせていただきます。

- (1)開催頻度に対しては、毎年開催を希望します。
- (2)ミドルディスタンス競技とすることに対しては、ロングディスタンス競技の継続を希望します。
- (3)開催テレインの固定化については、ある程度認めますが、意欲的な地域も含め、今まで以上に精力的にJOAによって開催地選定を推進して、全日本大会の発展を促していくようにお願いいたします。
- (4)については、冒頭に述べたように日本のオリエンティアが一堂に会するお祭りのような意義ある大会である。また、Eクラス単独で開催した場合、観戦のために来場する人はほとんどいないため、非常に寂しいイベントになってしまう可能性が高い。Eクラス出場者にとっても、応援者が激減することはモチベーションの低下に繋がり、オリエンテーリングの発展に大きなマイナスになってしまうと思われる。従って、エリートと他を

分離することについては、絶対に反対である。

(2015年4月30日)

JOA委員会の委員

(1)本ワーキンググループが分析している全日本オリエンテーリング大会における課題点の認識に相違や抜けがないか。相違や抜けがあるとしたら、それは何か。

全日本オリエンテーリング大会に直接関わる課題はWGで挙がった内容の通りであろうが、それを取り巻く環境整備という点で以下の1点を追加提案したい。

・メディアへの露出機会の不足

全日本オリエンテーリング大会は日本におけるオリエンテーリング競技最大のデモンストレーションになりうる場だが、それをPRするためのメディア露出機会が不足している。またより効果的なPRをするための演出意識が不足している。

(2)全日本オリエンテーリング大会開催継続のための提案。

開催頻度、開催時期、開催場所、実施競技については必要であれば現状の変更を検討してよいと思う。しかしそれ以前の問題として全日本オリエンテーリング大会を開催することで何を達成したいのか、そのためにこの大会をどのようなものにしていくべきなのか、全日本オリエンテーリング大会のコンセプトを再定義した上で議論を進めていく必要があることをまず提案したい。(ここで議論すべき対象は本来、春の全日本オリエンテーリング大会だけではなく秋に開催される全日本リレー、全日本スプリント、全日本ミドルも含まれるべきである。)

私が提案するのは「全日本オリエンテーリング大会を現代スポーツにふさわしいチャンピオンシップ大会にする」ことである。これまでの全日本オリエンテーリング大会はチャンピオンを決めるための大会として、またフィットネスオリエンテーリングを通じて各地へオリエンテーリングを普及するための大会としても開催されてきた。しかし(1)で挙げられた通り、難しい課題に直面している現状であれもこれもと多くを求めるのではなく、1つのテーマに集中しそこから現状を打破することを目指すべきだと考える。このコンセプトについての細案は(3)にて述べたいが、そのコンセプトを前提に大会継続のための提案をしたい。

(3)でも触れる通り現状の全日本オリエンテーリング大会と日本選手権の分離開催については反対である。全日本オリエンテーリング大会にて日本選手権を開催することのほうがメリットは大きいと考える。

一方で全日本オリエンテーリング大会にてフィットネスオリエンテーリングを同時開催することは考え直してもよいのではないかと思います。全日本オリエンテーリング大会をきっかけにオリエンテーリングに興味をもってくれた人たちのためには、大会前日や大会後に運営しやすい場所でチャンピオン等トップ選手を招いてオリエンテーリング体験会や講習会を開催したほうが新しい仲間を増やすチャンスは多いのではないかと感じている。トップ選手に丁寧に教えてもらいながらやってみると、競技者たちが盛り上がっている中でわけわからずやってみるとでは彼らが持つ印象はだいぶ異なる。全日本オリエンテーリング大会で初心者コースと競技者コースを同時提供するという負担を減らすことにもつながる。

また、エリートクラスなど長いコースを組むために地図を拡張することが大会開催の大きな障害になっているのであれば、地図を拡張しなくてもできる工夫をして予算内で無理なくできる範囲で最良のコースを組めばよいと思う。2マップ、3マップ方式で縦横無尽にコースを回せばよいし、セルフ地図交換あるいは1シート2マップ方

式などを採用すれば準備の手間がそれほど増大するとは思えない。距離の長いクラスのスタート時刻を大幅に早めるなどして競技時間をずらせば、他のクラスに干渉するようなコース回しでも気にすることなくコースを組むこともできる。トレインの範囲が狭くなれば設置やコントロール確認、撤収などの負担も軽減され、他部門の充実を図ることもできる。もちろん広大なトレインを用意できるならばそれにこしたことはないが、チャンピオンを決めるにふさわしいコースを用意するために広大なトレインが必要であるとは限らない。

開催場所については毎年の持ち回り開催は継続が難しいだろう。しかし開催地固定のローテーション開催だけでは面白みに欠ける。4箇所程度を固定開催地に指定し、3年に1度は固定開催地以外での持ち回り開催が参加者の感覚としては楽しみがあってよいと思う(例:2年間は固定開催地(A, B)で開催+固定開催地以外(X)で開催+次の2年間は固定開催地(C, D)で開催+固定開催地以外(Z)で開催+...)。固定開催地での運営は地元団体だけではなく近隣地域での合同主管やプロ集団への委託を検討するのがよいだろう。

参加費は現状では3000~5000円になることが多いが、他のスポーツと比較すれば5000~8000円でも競技者としては納得して出せるのではないだろうかと思う。もちろん若年層や学生への割引制度の充実や、値上げ分を納得できるだけの満足感を与えられる大会を作り上げることは必要。

開催時期はやはり年度末の3月では何かと便が悪いし、イベント目白押しの秋に持って行くのも難しく、暑い夏、寒い冬での実施も適さないと考えると5月~6月あたりに日程固定で開催するのがよいのではないかと。特にここでは日程固定(例:5月第3週の日曜日)を強く推したい。この日は全日本オリエンテーリング大会ということがあらかじめ分かっていたら、運営するほうも参加するほうもそして取材するほうも予定が組みやすく人を集めやすい。毎年開催地が変わるオリエンテーリングでは会場の都合などもありなかなか難しいことは承知しているが、しかしインカレや東大大会がほぼ毎年日程を固定して開催していることを考えれば不可能な話ではないし、本当にやむを得ない場合は±2週程度の範囲でずらすことは許容されるべきだろう。

少し飛躍すると持ち回り開催時には全日本オリエンテーリング大会と全日本リレーオリエンテーリング大会を2日間で同時に開催することも検討してよいと思う。各種全日本大会の中でも多くの参加者を集める2つの大会を同時に開催することで地方開催であっても確実の参加者を集めることができる。トレインは2日間同じ場所でのよい。競技の公平性の問題は指摘されるかもしれないが、どの選手どのチームも条件は同じである。2日間大会は運営側の負担が大きく増えることになるわけだが、2つの大会を別々に開催し、そのたびに地図を作り直すコストを考えれば長期的には負担が減ると考えることもできる。

ところで近年に始まった全日本ミドルと全日本スプリントは、果たしてどのくらいのニーズがあるのかわからないし、実際集客も低迷しているように思う。言い方を変えれば、もっとも人気のありそうなロングを全日本オリエンテーリング大会の実施種目にしておくのが開催継続にはもっとも有益なのではないかと考える。一方ニーズがない種目を無理して毎年開催する必要もないのではないだろうか。例えばアジア選手権がない年に全日本ミドル・スプリントの開催団体を募集し、アジア選手権開催年(全日本がない年)は日本代表選考レースのトップを日本選手権者と日本選手権は毎年開催にする、などの方法もありだろう。

さらには各種全日本大会の名称についても検討する時期だと思う。全日本オリエンテーリング大会、全日本ミドルオリエンテーリン

グ大会など種目ごとにそれぞれに名称がつけられているが、全日本オリエンテーリング大会ロングの部、ミドルの部という名称の方がすっきりするし、共用できる資材・消耗品も増え、運営の効率化につながるのだろうか。

(3) 全日本オリエンテーリング大会に参加する選手から見た、本大会に対する要望。

昨今のアウトドアスポーツブームのおかげもあり、現在オリエンテーリングのトップ選手には多くの社会的注目が集まっている。特にロングのチャンピオンはキング・オブ・オリエンテーリングと呼ばれるほどの尊敬を集める存在であり、そのチャンピオンが誕生する全日本オリエンテーリング大会はオリエンテーリングを社会へPRできるもっとも有能なコンテンツではないだろうか。全日本オリエンテーリング大会をチャンピオンシップ大会としてもっと魅力的なものに変えることでスポーツとしてのオリエンテーリングの普及を果たすこともできるはずである。

魅力あるチャンピオンシップ大会にするには大会が賑やかでなくてはならないし、そのためには多くの観客が必要だ。しかしオリエンテーリングがやはり観るスポーツとしてはまだまだ弱い。世界選手権でさえ併設大会を設けて観客を集めようとしていることを考えれば、全日本オリエンテーリング大会へより多くの参加者を集めるためには多くの人が意欲を持って参加もできる現状の年代別選手権としての側面を残しておいたほうがよい。現状で日本選手権だけを別開催した場合、たとえ併設大会を設けたとしてもその参加人数は100名程度にしかならないのではないかと危惧するからだ。

そしてチャンピオンシップ大会としての魅力を高めるためには、すべての参加者をできるだけ平等に扱うという現在のコンセプトを変え、誰が見てもあの人日本チャンピオンになったのだと知れ、多くの観客がチャンピオンをリスペクトできる演出を中心に据えたほうがメディア等でも取り上げやすいのではないかと思う。

例えば過去の全日本オリエンテーリング大会では多くの場合、エリートクラスの表彰式は最後に行われる。大トリはエリートで、という思いやりある演出から始まったものかもしれないが、しかし現状は延びに延びた表彰式にしびれを切らし参加者がごんごん帰路につく閑散とした会場で寂しく日本選手権者の認定が行われる状態だ。これでは愛好者の中でさえトップ選手への関心を増やすことはできない。

それを解決する方法の一例を考えてみた。エリートクラスは前日受付を原則とし、翌朝8時くらいからスタート、11時には決着。10時頃に会場へ到着するとちょうどよい他のクラスの参加者たちはエリートクラスの決着を見届けてからスタートへ、大部分がフィニッシュする頃にまずエリートの表彰式を盛大に行い、以降順位が確定したクラスから順次表彰。このような流れであれば、オリエンテーリングのトップシーンに関心を持つ人を増やすことができただろうか。

スタート時刻を早めることは運営者の負担を増やすように見えるかもしれない。しかしエリートクラスだけに必要な運営人数はそれほど多くないし、エリートクラスは少数精鋭のプロに任せるというのも手であろう。

朝8時スタートというのは極端な例だが、エリートクラスのスタートを少し早めにし、多くの人がいるうちに決着し表彰されるという演出は来年の大会からでもぜひ検討していただきたい。また競技時間が長いエリートクラスや21Aクラスなどのスタート時刻を早めることは、他のクラスへの干渉を気にせずコースを組める、フィニッシュ閉鎖時刻を早める、などコンパクトな運営を実現する一手になることも期待できる。

まずは「競技者・愛好者自身がトップ競技者へのリスペクトを高め、関心を持てるような環境を作る」ことが大事である。参加者が興味を持っていないようなステージにメディアが食いつくことはないと思うからだ。細かなことを言えば、歴代日本選手権者の一覧表は毎年の大会プログラムに掲載してほしい。

一方でステージが用意されたからといってメディアが来てくれることはなく、実は別の施策が必要となるわけだが、いつ誰が来てでも誇れるようなステージを用意しておかなくては現代スポーツとして生き残ることはできないのではないかと思う。

そして観戦する文化が育まれた後に、理想の競技環境を求め日本選手権と年代別選手権の分離開催を検討する、という長期的なビジョンを見据えておくことが必要だと思う。

(2015年4月30日)

ディレクター

(1)WGの資料の中の「全日本オリエンテーリング大会の現状」について

1. 基本コンセプトの一つに「地方持ち回り」があるが、同じ全日本大会を開催するにしても規模の大きな協会と規模の小さい協会では当然その大会開催能力、影響(疲弊度)には大きな違いが考えられるにもかかわらず、ここまで全国平等ということで、地方の弱小協会に負担を強い続けてきたことが大きな問題である。(会費の平等負担と同様の構図)。もっと早く改善すべきだったのではないか。

2. 「金銭的収益はない」とのことだが、本当に収益を上げるような、あるいは収支プラスマイナスゼロの運営はできないのだろうか。そのような努力をしてきたか。多くのOL団体、クラブなどが大会の収入によって運営していることを考えると、参加者の多い全日本大会で収益を上げることができないといわれるのは不思議でもある。突っ込んで検討することが必要である。

3. 「他の事業に悪影響を及ぼしていることがある」ということについては、全日本という大きな事業をやれば、いろいろな面で多かれ少なかれ影響があるのは当然であり、悪影響と考えるべきではない。

4. 「全日本のフィールドがその後有効活用されていない」。確かに指摘されているような事例があるかもしれないが、ここ数年の実績を調べてみるといずれもすでに使われたテレインのリメイクであり、この指摘は必ずしも当たっていないのではないかと。全日本を契機に立派な地図ができるのであるから、その有効活用を積極的に考えるのが本筋ではないか。もし現実にもどうしても有効活用できないのであれば、その原因は地方持ち回りの負の面が現れていると考えられる。

5. 毎年開催の需要
毎年開催されるべきものとする。われわれの社会は1年をサイクルに回っており、スポーツの世界も例外ではない。どんなスポーツでも日本選手権は毎年開催が通例である。世界選手権ですら隔年開催から毎年開催に変わった。毎年開催されるからこそ、その開催が期待され、需要が維持されると考える。

6. 日本選手権(ロング)としての需要
世界の主流はロングである。世界を見据えた場合、ロングから離れるべきではない。ロングであっても2マップ方式や回しによって必ずしも広大なテレインが必要ではない。日本は山がちな狭い国土であるから海外と同じに考えることには無理がある。工夫によって克服すべきであり、またこの50年そのようにしてきたはずである。
200万円では足りないという記述があるが、その後の利用による資金の回収も当然考えに入れなければおかし。

最近数年の全日本を見てもそれほど広大ではなく、ニューマップでもないテレインで行われてきた。再三利用されているテレインもある。理想ではなくもっと地に着いた議論をしてほしい。

7. 年令別選手権としての需要

世界選手権は別にして、世界のオリエンテーリングの主な大会はすべて5歳刻みの年令別である。この世界基準から離れるべきではない。徹底した年令別というオリエンテーリングの特徴を生かすべきであり、その需要(期待)は大きい。

8. 地方持ち回りの需要

地方持ち回りに問題があることが分かりながら改善せずに固守してきたところに一番大きな問題がある。地方持ち回りの需要?(必要性)はあまりないといっている。

- ー公平性の確保 理屈上は確かにそうだが、現実にはあまり意味はない
- ースポーツツーリズムの推進 競技という点からはほとんど無意味
- ー参加者への楽しみ(QOL)提供 意味不明

(2)提示されている選択肢について

1. 開催頻度の変更ー例えば隔年開催

頻度を変更しても問題の解決には何ら寄与しない。例えば隔年にしたところで、その開催の年(の主管者)にとっては挙げられている課題(問題点)は何ら解決しない(毎年開催と変わらない)のであり、単に問題が隔年に来る、すなわち頻度が減るだけに過ぎない。そして参加者の楽しみも半減する。前述の通りどんなスポーツでも日本選手権はじめ大きな大会は毎年開催が通例である。

隔年開催への移行は衰退の第一歩とも考えられ、参加者の減少をもたらすかもしれない。

2. ミドルとすること

オリエンテーリングの基本は世界的にロングである。日本がガラパゴス的にすなわち世界から隔絶して日本独自のOLを歩む方向をとる覚悟がないならば、この選択肢はとるべきではない。ただでさえ短い日本のロングなのに、それからさらに短いミドルが主流になった時、日本のオリエンテーリングがどのようになるか長い目で考えてほしい。選手権だけはロングで、という発想は近視眼的には成り立つかもしれないが、長期的には全日本大会はじめ基盤にロングがなくなれば、日本には世界に通用するオリエンテーリングはなくなると考えるべきである。

3. 開催テレインをある程度固定化すること

地方持ち回りをやめれば必然的にこの方向に向かうはずである。固定化するとしても誰が主管するか、のほうの問題が大きい。テレイン固定化は選択肢にならない。

4. 選手権クラスとそれ以外の大会を分けること

社会通念として、省力化、経費節減、合理化のためには合併(一つにまとめる)が行われる。それと反対の方向に行くことが合理化になるというのは大変考えにくい。分ける方がいいのであればそのプラスマイナスをすべて挙げて十分検討しないと方向を間違えることになる。単にテレインが狭くて済むというだけの問題ではない。収支面、要員面など多くの点でマイナスに作用する可能性が考えられる。

(3)対案

提示された4案はいずれも短期的には多少は改善に向かう

部分があるとしても、長い目で見た場合いずれも解決策にならず、むしろ将来的には日本のオリエンテーリングの衰退をもたらすという負に作用する可能性が大きいと思われる。

以上の検討を踏まえ、以下に対案を示す。

『全日本大会の運営を全面的に「プロ」に委託する』

説明:

- 大きく次の3点があげられる。
 - ①上げられた課題(問題点)をほぼすべて解決できる
 - ②これによるマイナス面はまず見当たらない。
 - ③プロの育成に大きく寄与する。
- これまでは協会加盟員が運営を担ってきたが、最近の社会情勢は仕事を持つ若い層にはオリエンテーリングのためのボランティア活動の余裕、特に地図調査・作成のような時間を要する活動の余裕がなくなり、一方時間の余裕がある高年層には地図調査に必要な体力・技術が乏しいという問題がある。現実すでに地図調査/作成/調整をプロに委託するケースが増えてきている。
ボランティア方式による大会の開催は全日本に限らずそろそろ限界にきつつあると考えた方がよい。今後は地図作成に限らずプロに委託する場面が増加していくと思われ、この方向は当然の流れと考えてよい。
- 委託する範囲はトレインの選定から地図の調査・修正、コース設定、開催期日、役員の募集、当日の運営などまで、ほぼ全面的に委託する。渉外については地元協会にサポートしてもらおうが実際的かもしれない。
地図調査だけを委託するという考え方もあるようだが、中途半端な委託は期待する成果を上げられない可能性があるのでやめて方がよい。
- 競技の内容面については競技規則、地図規程などがあり、それらに準拠することでまったく問題ない。
- 収支面については、すでにプロが成り立ち、プロによる大会が行われており、問題になることはないと推定される。むしろ全日本大会そのものの開催・運営が効率化されることが期待できる。
例えば地図調査を例にとると、ボランティアが休日に細切れに入山するよりも、プロが長期滞在して行う方がはるかに効率的なはずである。地図調査に限らずすべての面で効率を意識して運営されるはず。
- 地図・コースをはじめとする競技の品質面で期待できる。
- 特に「③プロの育成」の意義が大きい。今後ますますプロに依存せざるを得ない状況が予想される中であって、その育成にまず必要なのはその活躍の場の提供にある。それによって育成に大きく寄与するはずである。
ただし当面は過渡期としての対応が求められるかもしれないが、将来の形をきちんと決めて迷わずに進めることが望ましい。現実問題として、プロが引き受けるかどうかという問題もあるので、協議しながら逐次委託の範囲を広げていくことが実際的かもしれない。

(2015年4月30日)

都道府県協会 事務局

今回意見を申し上げるにあたり、中間報告全体に対しての意見も述べさせていただきます。

【全体に対する意見】

報告書はコンパクトにまとまっており、問題点等を的確に示していると思いますが、コメントを求めるには少しコンパクトすぎと感じました。

問題・課題の洗い出しはしているものの、これに対する検討内容の記載が少なく、4つの提案に至るまでの内容がよくわかりませんでした。全日本大会のあり方といった非常に重い課題に対し、この中間報告文の内容でコメントを求められてもつらいものがあります。

また、構成員についても、JOAの役員、理事ばかりでなく地方で頑張っている運営者を含めなければ、真の声を捕らえることができないのではないかと思います。

付帯資料として、これまでの議論の詳細な内容をつけるか、中間報告を行う前に公聴の機会を設けるなどすべきだったのではないかと思います。

【中間報告に対する意見】

(1) 本ワーキンググループが分析している全日本オリエンテーリング大会における課題点の認識に相違や抜けがないか。相違や抜けたあるとしたら、それは何か。

- ① 全日本オリエンテーリング大会を運営した都道府県協会は疲弊し、その後の活動に影響が出ている。
当県協会では、過去に何回か全国的な大会を開催していますが、そのたびに財政的な問題も含め疲弊しています。まさにその通りだと思います。
ただし、当協会では将来も利用可能なトレインでの開催や用具の更新など、資産の有効活用を狙っており、金銭的収益は確かにありませんが、財産は残ると考えており、現状にあるような課題は当てはまりません。
- ② 金銭的収益はない
当協会では全日本大会開催に当たって、補助金・協賛金を約330万円確保しました。この金額が確保できたのは、当協会に携わった諸先輩方のこれまでの地道な活動が関係機関に実績として認知されていること、年会費の負担は重いが県体協、県レク協に加盟していることが大きかったと思います。
確かに今回は恵まれていたのかもしれませんが、他の協会でも同様に確保した事例はあるはずですので資金確保手段など、成功事例を基にもう少し追及してはいかがでしょうか。
- ③ 日本選手権としての需要、地方持ち回りの需要
地方で全日本大会を開催するに当たっての一番の問題は、運営スタッフの確保と地図の精度をはじめとする高水準のレベルです。運営スタッフの確保ができ、大会の水準を落とせば、中期的な展望として地方での開催は可能だと思います。この点をもっと議論すべきです。

本中間報告を見ていると、「運営担い手もない状況で大会水準は落とさず大会を開催」を前提に構成されていると思います。これでは地方の現状を的確に反映した議論になっていません。本報告から開催方法(4)が提案され承され、例えば6~10年後に当地域ブロック、当県で開催を打診された場合、NOと言わざるを得ません。

今回の全日本大会でもスタッフの確保、地図作成が一番の課題でした。事前準備では試走を除き主要スタッフ4名で準備しています。このため、行き届かなかった部分がかかなりあり、高い参

加料に見合った大会になっていなかったのではないかと感じ
ており、参加者には大変申し訳思っています。

また、地図作成も委託したものの、受託者に時間的余裕がなく
十分とは言えない状況での大会開催となっています。(ただ、結
果から言えば基図ができていれば、我々のレベルでもある程度
の水準を確保できたみたいですが。)

この面言えば、今回の大会は色々な面で問題提起できた大
会なのではないかと思しますので、これをベースに、運営スタッ
フの問題、水準の問題をもう一度議論してもいいのではないか
と思います。(詳しくはコントローラの報告書を見てもらえればと
思います。)

(2) 全日本オリエンテーリング大会開催継続のための提案。

今後の大会開催継続に当たっては、WGの結果(1)を支持し
ます。(4)は大変申し訳ないのですが、限られた人数のため
に大会を開催することのメリットが中々湧いてきません。2大
会を開催するデメリットの方が大きいと思います。
補助金を確保する場合、大会の規模が問われます。補助す
る側は、少ない金額でどれだけ多くの効果を得られるかを聞
いてきます。今の全日本大会の参加人数から言えば、高額
の補助金を確保するギリギリの水準です。また、2大会運営
の場合、運営スタッフの負担も大きくなります。地方としては
づらい選択だと思います。ただし、選手権の方の運営費用、
中枢スタッフをJOAで確保するのであれば別ですが。

開催時期を年度末でなく、例えば5月にして毎年開催の形に
すれば、運営者の立場としても年度末の忙しい時期を避けら
れ余裕もできますし、冬場の地図調査内容も何とか反映でき
るギリギリの線で精度もある程度確保、各種選考レースにも
活用できるのではないかと思いますので、(1)の案に沿って
隔年開催でなく、当面は時期をずらし毎年してみてもいい
と思います。(3)はトレインを固定してしまうと、会員がトレインを使
いたくても使えなくなってしまうデメリットの方が大きいと思
います。

大会を継続するためには、時期とか場所とか開催手法でなく、
上述したとおり、運営担い手(スタッフ)の確保と大会水準の
問題です。これを解決しないと(1)~(4)の案も無理がある
と思います。

大会水準を現行のまま維持するのであれば、JOAが主導
的立場になって①地図調査方法(トレインの現状を把握した
上で委託の是非、委託先を指定)、②運営スタッフの確保へ
の協力(例えば、全国から数名派遣する、極端な話、選手権
や対象者上位クラス参加者の一部を数年に1回は強制的に
運営に参加させるなど)、③必要資機材の確保(くだらない話
ですが、給水タンクや救急用具などは、大会後、無駄な備品
として残ってしまうので、JOAで確保し、持ち回したほうが効
果的だと思います。)を行うなど、運営面での見直しを行うこ
とが先決だと思います。

最後になりますが、上記に捉われず、全日本大会に参加する
方々が運営面を含め大会をどのように思っているのかが一番重要
です。参加者の意見を十分に把握してもらい、反映していただく
のが最適だと思いますので、よろしく願い申し上げます。

(2015年4月30日)

都道府県協会 事務局

1. 本ワーキンググループが分析している全日本オリエンテー
リング大会における課題点の認識に相違や抜けがないか。相違
や抜けがあるとしたらそれは何か。

・WREとの絡みも課題点としたらいかがでしょうか。全日本大会
を開催した運営者として、もっともプレッシャーがあったのは、
WREの指定となったことであり、その結果トレインの状態は最
終的にはあまり考慮せず、「ロング=1:15,000MAP」で無理やり、
開催せざるを得なかったことです。今後とも、世界で活躍する選
手をたくさん出すためにも、全日本大会=全日本ロング選手権
大会=WRE大会とするのは、重要なことでありますので、ロン
グにふさわしいトレインで全日本を開催し、そのためには、(3)、
(4)での全日本選手権大会(ロング)開催が良いと思います。

2. 全日本オリエンテーリング大会開催継続のための提案。

・トレインの制約上、全日本「選手権」(ロング)は数か所のそれ
にふさわしいトレインでの開催とし、全日本「選手権」(ミドル)
の開催は地方持ち回りということで行えば、全日本大会の4
つの基本コンセプトを維持しながら継続していけるのではない
かと思います。

・当県での全日本大会もそうでしたが、パトリダーは当県か
ら出して事前準備を行い、運営サポーターは隣県から支援を
受けてメール等で運営マニュアルを事前に読んでいただいて、
現地は主に前日からということで開催ができ、県外運営者が
過半数を占めました。合宿形式の前泊はブロック内の交流に
もなりましたので、その後の地域の連携にも貢献しているの
ではないでしょうか。そのため、ミドル大会ではブロック内での
共同開催とするとか、ロング大会などは全国から運営支援を
募るというのもよいかと思えます。

・過去の東日本大会では、中級指導者研修を同時開催し、その
実地研修として当日の運営支援をいただきました。当県は運
営者が少なく、いつも支援を受けてばかりです。

3. 全日本オリエンテーリング大会に参加する選手から見た、本
大会に対する要望。

・Eクラス以外は、その予選の21Aなどを除いて、現在の全日本
大会をロング大会とあまり認識していないし、ロングで5歳階
級年齢別選手権大会を実施するという必然性も感じていない
のではないのでしょうか。現に私がそうですし、当県で実施した
全日本大会もEクラス以外は「1:10,000MAP」で実施しており、
コース設定も決してロングとは言えないものになってしまった
と思っています。

・そのため、現在のロングとミドルのクラス分けを逆にして、全日
本選手権大会(ロング)は、10歳階級あるいは、もっと大きな、
35A,50Aなどのくくりで、ロングにふさわしいコース設定による
選手権大会としてはいかがでしょうか(ロングを走れる人しか
参加しなくても仕方ない)。また、逆に、すでに開催し始めた、
全日本大会(ミドル)では5歳階級年齢別「選手権」大会を開
催することで、それぞれの能力に合わせて選手権大会を目指
すことができるのではないのでしょうか。

・全日本ロング大会に、21ASを設けるのもおかしな話で、これを
設けた時点ですでにロング大会とするという論理が破たんし
ており、中途半端なためにかえって参加者も減っていますし、

このやり方だと不要になります。

- また、社会人になってしばらくして大会に参加する人に対して、今の制度では21Aにしか参加できない、かといって、35Aまでにはまだまだ時間がある、参加するクラスがないという声を聞いており、そこでロング大会に21ASなどという付け足しの対策をとったのかもしれませんが、21Aから35Aまでのステップが高いように思います。「21AはあくまでもEクラスの予選」とするならば、それを目指さない、社会人になって運動不足でメタ簿気味の人がOB会を兼ねてOLを楽しむために参加できる25A、30Aなども配慮してもらえるといいなとおもいます(もちろんミドル大会ですでにそれらしいクラスを設定できるようなにはなっていますが)。この間のギャップがあるから、社会人になってからそのあとOLを継続できないとまでは言いませんが、少しでも引き留めておくのに役立つかなと思います。(2015年4月30日)

った。その観点からは、ロング競技を経験する機会を確保することも、同時に検討すべき重大な課題である。具体的には世界選手権、アジア選手権、ユニバーシアードなどの代表選考を兼ねたロング競技会を4月に開催する、テレインは5箇所くらいの持ち回りとし地図作成の負担を軽減するなどの案が考えられる。

まとめと提言

- ・全日本大会は継続開催を前提に将来展望を検討すべきである
- ・採用種目は、オリエンティアの嗜好性と費用対効果、主管都道府県の負担を総合的に考えてミドル競技の採用を検討すべきである
- ・ロング競技を行う場を全日本大会とは別に設定することを検討すべきである

(2015年4月30日)

競技者

オリエンテーリングというスポーツに長い間かかわってきたオリエンティアの一人として、パブリックコメントを提出させていただきます。

全日本オリエンテーリング大会の開催意義

全日本オリエンテーリング大会(以下、全日本大会)は41年間にわたり継続して開催されてきた歴史ある競技会であり、全日本選手権および年代別クラスの優勝者を決める我が国でも最も重要な競技会である。その点から全日本大会の開催には大きな意味があり、開催継続を前提に、どうすれば継続的に開催できるのかを議論すべきである。

ロングかミドルか(競技者の嗜好性の観点から)

これまで全日本大会では基本的にロング競技が採用されてきた。ロング競技とミドル競技は単に競技時間が違うだけでなく、コース上で設定される課題が大きく異なる。日本人のオリエンティアは、一部の競技者を除いて、ミドル競技で設定される課題(細かな地図読み、林の中でのナビゲーション、スキルを要求されるアタックなど)を好み、ロング競技で設定される課題(ルートチョイス、フィジカル面の強さ)を好む競技者は少ない。この傾向は加齢とともに強まり、中高年のオリエンティアは基本的にミドル競技好きと考えて間違いはない。その観点からは、全日本大会でミドル競技を採用することは、ほとんどのオリエンティアにとってむしろ歓迎されることだと推測できる。

ロングかミドルか(資源の有効活用の観点から)

ロング競技を開催できるテレインは限られており、競技時間が長いことから、地図作りに要する時間も長くなるが、だからといって、ロング競技用に作成した地図の利用度が高いわけではない。全日本開催後のテレインと地図の有効活用を考えたら、ロング競技の採用は、費用対効果の観点から著しく不効率である。また、ロング競技を採用することで、主管都道府県の負担が増え、大会終了後の組織運営に悪影響が生じているとしたら、その観点からも負担が軽減され、資源の有効活用が容易なミドル競技の採用を検討すべきである。

選手強化におけるロングの重要性

その一方で、世界選手権などの国際的な競技会を目指すトップクラスの競技者にとって、本格的なロング競技を走る機会に限られており、全日本に向けての準備と全日本への参加は、海外の国際競技会出場への準備を兼ねた重要なプロセスであった。また、ロング競技の選手選考を全日本で行うこともあ

東京都オリエンテーリング協会

日本オリエンテーリング協会が全日本オリエンテーリングの将来についてのパブリックコメントを開始したのを受けて、東京都オリエンテーリング協会は参加加盟クラブへのパブリックコメントの周知及び意見の収集を行うと共に、3月、4月の理事会において理事の方々意見交換を行った。

ワーキンググループが提案している全日本大会の開催を継続していくための選択肢(1)~(4)について、主に論議を重ね、東京都オリエンテーリング協会として意見を集約させた。選択肢によって、意見がまとまったもの、賛成・反対と意見が分かれたものがあり、本意見書では東京都オリエンテーリング協会としての結論、論議の中で出た意見を記載することとする。

1. 「開催頻度を変える。たとえば、隔年度の開催とする。」ことについての意見

[結論]意見はまとまらなかった。

- ・隔年開催に賛成。隔年開催にして主催者の負担を減らし日本選手権(ロング・ディスタンス)を継続的に実施する。
- ・隔年開催に反対。どんなスポーツでも日本選手権は毎年開催が通例である。隔年開催への移行は衰退の一步であり、参加者も減少する可能性大である。

2. 「全日本大会をミドル・ディスタンス競技とする。」ことについての意見

[結論]ロング・ディスタンス大会の全廃には反対である。

- ・ロング・ディスタンス大会を秋に隔年で開催することを前提に、ミドル・ディスタンス大会を春に開催する。
- ・オリエンテーリングの基本は世界的にロングである。日本がロングを止めてしまうことは世界から取り残されることになる。

3. 「開催テレインをある程度固定化し、その中で複数年のローテーションで全日本オリエンテーリング大会を開催する。」ことについての意見

[結論]開催テレインのある程度の固定化には賛成である。

- ・ロング・ディスタンス大会ができる既存の数か所の精度のよい地図をローテーションで使用することにより、地図調査の費用を最小限にする。
- ・テレインの固定化とともに主管者の地方持ち回りは止め、主管者も余力のある地区に固定する。

4. 「選手権クラス(Eクラス)とそれ以外の参加クラスで、全日本オリエンテーリング大会を分ける。」ことについての意見

[結論]意見はまとまらなかった。

- ・ロング・ディスタンス大会は選手権クラス 21E とその予選の 21A、ジュニア選手権クラス 20E とその予選の 20A のみとし、距離の短い年齢層のクラスはロング・ディスタンス大会はやらない。
- ・一つの大会を分割することは一つ一つは省力化できたとしても、結局二つの大会を行うことになり、費用および労力は多くなることが考えられる。
- ・ロング・ディスタンス大会に距離の短い年齢層のクラスを追加しても、運営の負担増にならないのではないか。

5. その他の意見

東京都オリエンテーリング協会全体としてではなく、個人の意見をまとめる。

- ・全日本大会の運営を全面的に「プロ」にまかせる。委託する範囲はトレインの選定から地図調査、コース設定、当日の運営に至るまでほぼ全面的に委託する。これによって競技の質を高めることが出来る。
- ・現行のロング・ディスタンスの大会を維持していくために、参加費を値上げすることも考えるべきである。
- ・ロング・ディスタンス大会を日本学生連盟のインカレ・ロングと共同で行ったらどうだろうか。

(2015 年 4 月 29 日)

競技者

1. 全日本オリエンテーリング大会開催継続のための提案

- 1) 全日本オリエンテーリング大会を全日本選手権大会と併設公認大会の同時開催とする。
具体的には M20E、ME、W20E、W21E のみを全日本選手権大会として、他クラスは併設公認大会とし、併設大会参加者は選手権大会の 観戦が十分行えるよう競技時間を調整する。また、全日本選手権大会はロング、併設大会はミドルとしてコントロールフラッグ設置を省力化する。なお、将来の全日本大会とは別に、現在の全日本ミドル大会を年齢別選手権大会に換えて実施する。
- 2) 北日本地方での年度内開催を可能とするため、オリエンテーリング競技年度開始を6月1日または7月1日とする。
北海道での年度内開催を可能とするため、雪解け後から全日本大会開催までに地図調査・コース設定を行えるよう全日本大会開催を5月または6月とする。5月の連休中に全日本大会を開催すれば参加者の増加が期待できる。
- 3) 学生選手権大会との日程調整
現在は学連ミドル・リレー選手権が3月に開かれている。学生の全日本大会参加を促すために、上記2)のように全日本大会を5月か6月に開催する。
- 4) 大会開催業務、特に地図作製の業者委託
日本にある数少ないプロマッパー会社らはロング大会を開催できる地域の地図を複数作製しているため、それら地図に示される地域を5年以上の間隔をもって再度、全日本大会に使用でき、それにより地図調査に要する経費を節減できる。
- 5) 全日本大会運営ボランティアの募集
競技者としてではなく、運営者として全日本大会に参加する人を募集する。前日からの大会準備や競技者の子供の託児などを運営ボランティアに依頼する。

(2015 年 4 月 29 日)